生きる力

SHINGON

平成十年十二月十六日第三種郵便物認可　第九十二号　平成三十年三月二日発行　年四回（六月・九月・十二月・三月の一日）発行



［特集］生きる力
―仏さまに祈り、仏さまと出会う

Vol. 92

真言宗智山派

Vol. 92 生きる力 SHINGON
仏さまに祈り 仏さまと出会う

目　次

今日の法語　小橋敞徳……2
智山寺院探訪 千光山生善院……3
特集　生きる力
―仏さまに祈り、仏さまと出会う……6
お大師さまとご信仰　田村宗英……10
いただきますの心　音羽和紀……11
図解・仏教ガイド「マンガでわかる十三仏⑩」
え・悟東あすか……12
ゆーけいの写仏をするよろこび
牧　宥恵……14
日本の四季を切り取る十七文字
星野高士……15
総本山の便りをお知らせします……16
私の夫はお坊さん　大塚哲子……18
ごくらくらくご　三遊亭竜楽……19
御詠歌で綴る十善戒の教え
佐々木眞光……20
読者アンケートから・おしらせ・編集後記……22
真言宗智山派出版物のご案内……23
桃山の息吹に触れる　安原成美……24
刮目！　仏教体験記 内藤理恵子……26
花に聞く 仏に聞く　佐々木隆元……28
仏教と妖怪　今井秀和……29
やきものをたのしむ　柳田栄萬……30
別院真福寺の年中行事②……31

仏教について　仏教と文化
わたしたちの生活と仏教　お知らせ

表紙写真　埼玉県小川町　木造校舎

廃校になっている旧小川小学校下里分校です。大きく枝を広げた桜が木造校舎の脇に咲く風景は、なにか懐かしさを感じさせます。今にも子供たちが、歓声を上げながら校庭を走ってきそうです。

目次写真　高知県仁淀川町　ハナモモ咲く里

土地の人が大切に育てている白やピンクのハナモモが満開です。山の斜面にきれいに並んで咲いているのは、集落のどこからも誰からも鑑賞できるようにという願いがあるからでしょうか。まさに桃源郷というにふさわしい風景です。

撮影・解説／佐藤尚



今日の法語「利他」

小橋敞徳（新潟県佐渡市・延命院住職）

利他

「世のため人のために生きる」という言葉は時代おくれだとする向きもある現代。私たちは改めて、何のために生まれ、生きているのかを問い直すべきではないでしょうか。

自分さえ良ければいいという利己主義ではなく、相手の利（幸せ）が自分の利であり、自分の利が世の中の利となるような気持ちで日々過ごすことで、自分は〝生かされている〟ということに気づき、自然と感謝の心が生まれてくるのではないでしょうか。





生善院山門へ続く参道と山門で参拝者を迎えてくれる「阿形の狛猫」。山門も寛永二年（1625）建立時のまま。

智山寺院探訪

九州八十八ヶ所百八霊場
第九十八番札所
相良三十三観音霊場第二十四番札所

熊本県球磨郡

千光山　生善院

皆さん、猫はお好きですか？　今回訪問した生善院は「猫寺」の愛称で親しまれる猫ずくめのお寺なので、犬派だとしても、動物好きの方にはきっと違った趣の参拝ができますよ……。参拝の入り口、山門でお寺を守護すべく鎮座するのは「狛犬」ならぬ「狛猫」。お参りの第一歩から猫ずくめが始まりますから。

千葉弘実ご住職がその理由を寺伝からお話しくださいました……。

生善院のある球磨郡は相良氏が治める人吉藩として明治維新を迎えましたが、戦国時代末の天正九年（一五八一）には、島津氏の侵攻にあい十八代当主・義陽が討たれると、義陽の長男・忠房（当時十歳）を十九代に立てるものの、その弟・頼房（当時八歳）を島津に人質として送り和議を結ばざるを得なくなる、お家存亡の機に見舞われます。

そんな折も折、家督の後釜に座ろうと義陽の腹違いの弟頼貞がこの地多良木にやってきます。頼貞は義陽と絶交状態だったのですが、多良木の出城城主である湯山宗昌と、その弟で普門寺住職の盛誉が面会して丁重にお帰りいただきます。ところが、宗昌失脚の機会を狙っていた対抗勢力が「宗昌と盛誉は頼貞と結託して球磨を攻める気である」と藩主忠房に讒言します。その結果討伐が決まりますが、宗昌は日向に逃げるものの盛誉は何食わぬ顔で普門寺に残りました。

讒言するものは大概意気地なしです。策略が発覚することを恐れた卑怯者は、討伐中止の命を伝えるのが犬童九介だと見越し、酒好きな九介の欠点を利用して、道中の宿場に「人吉から馬で来る者には接待として焼酎を出すように」とお触れを出してしまいます。一方討伐前夜、相良家の家老は「宗昌はまだしも、盛誉は仏に仕える身、謀反などを起こすだろうか……」と胸騒ぎを覚えます。「無実の者を殺しては取り返しがつかない……。九介や、討伐中止の命を届けるのだ！　しかしよいか、好物の焼酎だけは、くれぐれも控えておくれよ」「心得て存じます」

駿馬を駆った九介は風のように疾走したそうです。走れ！　急げ！　道中、宿場で水を求めます。宿の主人は偉いお使いに違いないと



観音堂にて寺伝をお話しくださる千葉弘実ご住職。



国の重要文化財、生善院の観音堂。防犯のため普段は施錠していますが、事前に連絡いただければ堂内をご案内することもできます。拝観料は特に決まっていませんが、ぜひ灯明料をお納めいただければと、僭越ながら私からお願い申し上げます。

と、大きな湯飲みに何杯も焼酎を差し上げました。不覚にも酩酊してしまう九介、道端で眠り込んでしまいます。

三月十六日早朝、討伐中止の命が出ていることを知らぬ討伐軍は普門寺に押し入り、勤行中の盛誉を一太刀にて斬首、寺に火を放ちます。その頃目を覚ました九介。普門寺をめざしますが、遠くに昇る煙を認めると、その非を詫びて切腹したといいます。

宗昌と盛誉の冤罪は晴れますが、二人の母親、玖月善女の悔しさはおさまりません。愛猫の玉垂と市房神社に参篭し断食を始めます。やがて精魂尽きた玖月は自分の指を噛み切りその血を玉垂に舐めさせて、「ともに怨霊となって相良家を祟るのだよ」と言い含めると、愛猫を抱え茂間御淵に身を投じるのです。

すると相良領内で奇怪な出来事が次々と起こり、忠房が十四歳で早世。不可思議な現象は鎮まることなく、跡を継いだ頼房が寛永二年（一六二五）、普門寺跡地に生善院を建立。観音堂に盛誉の影仏として阿弥陀如来（現在は本堂のご本尊）、玖月の影仏として千手観音を奉納開眼し、盛誉の命日には毎年、当主と領民が参詣するようお達しを出しますと、ようやく不可解な呪いが鎮まったそうです。

嫉妬、羨望――挙句の果ての狡猾さと浅知恵が生んだ悲劇が生善院建立の背景にあったのですね。だから、生善院は猫にゆかりのあるお寺と……。

山門をくぐると正面に本堂、右手に観音堂。観音堂は創建当時のまま残ります。「人吉様式」と呼ばれる寄棟造が特徴で国の重要文化財。平成十三年には大改修を行い、当時の様子を再現すべく彩色を施しました。

観音堂内部は全体が黒漆塗で、天井の格子には金箔と朱塗りのアクセント。壁板には馬の彫刻が――奉納された絵馬とも、九介の菩提を弔うためのレリーフとも……。正面に極彩色で飾られた須弥壇とその上に厨子が安置され、厨子にも目を見張るほどの寄棟造りが……。須弥壇の嵌板部分に目をやると、左甚五郎作かと見紛うばかりの愛らしい眠り猫が彫刻されています。この猫はきっと玉垂でしょう。もはや恨みも忘れ、安らかな顔で厨子の中の玖月をお護りしているようです。

厨子の中には千手観音さま。お堂の中は暗いので、近づいてゆっくりと目を慣らし、しばらくじっとお参りしていると、やがてその螺髪の綺麗な藍色と、唇にしっとりと引かれた紅の色が浮かんでくる――こちらに向かって手を合わせてくださるお姿のかたじけなさに涙がこぼれそうです。玖月はこの仏さまのように美しく穏やかな方だったに違いなく、だからこそ、その玖月の怒りに人々は怯え、その怒りを鎮めるために素晴らしい観音堂と、美しい千手観音を建立奉納したのでしょう。

観音堂の脇には、盛誉と玖月と玉垂の墓所が仲良く並んでいます。江戸時代、生善院境内は掃除いらずといわれたそうですが、それは毛づくろいをする猫の美しさにあやかろうと、近くの色町から毎日多くの花魁が玉垂の墓所を参拝し、着物の長い裾が自然と境内を掃き清めたからだといわれます。しかしなかには、玖月の美しさに憧れてお参りする花魁もいたはずです。



壁板の馬（上）と須弥壇嵌板の眠り猫（下）。

本堂も観音堂と同じく寛永二年の建立。入り口には「猫おみくじ」が並び、可愛いかわいいと見とれていると、脇には江戸時代からお寺に伝わる版木で刷った「猫守りのお札」。廊下には来年の猫寺大祭で初お目見えする「猫神輿」。本堂座敷の襖には今年奉納された ばかりの華やかな「遊猫水墨画」と、ひな人形ならぬ「ひな猫」が飾られます。

いたる所に猫とゆかりがある浪漫チックな猫寺のこれからを模索するご住職。「この地域は相良家が代々治めてきたので文化財が大切に伝わりましたが、自分が住職になって、受け継いだものを後世に伝えることがいかに大切で大変かを実感しています。少子化、高齢化、過疎化の波はすでにこの地域にやってきていますし、これからの〝猫寺〟の興隆をどうしていくか、経済的にも大きな問題です。観音さまの、人々の苦悩を観、聞き、あらゆる場所に自在に現れ、人々を救済する願いを自らの願いとし、お寺の魅力を伝えていければと思います」。

多くの方が猫寺にお参りされますように……。

（文／智山教化センター所員・小山龍雅
写真／村中修）



観音堂ご本尊千手観音さま。精緻な彫刻と素晴らしい金細工、そして可憐な藍と紅の色がお分かりになるでしょうか。ご本尊さまは普段は秘仏で、御開帳は年３回。盛誉の命日にあたる旧暦３月16日前の日曜日に行われる「猫寺大祭」（今年は４月29日）と、春秋のお彼岸のお中日です。



ACCESS アクセス

千光山生善院
九州自動車道「人吉IC」より約50分。くまがわ鉄道「湯前駅」より徒歩20分、タクシー5分。
※観音堂は普段は施錠してあります。また、ご本尊千手観音は年3回御開帳の秘仏です。
〒868-0701
熊本県球磨郡水上村岩野3542　　電話　0966-44-0068



生善院の猫ずくめ。「猫おみくじ」（右上）は猫の中からおみくじが出てきます。「猫之守」（左上）は生善院が江戸時代から猫寺として親しまれていた証。「猫神輿」（右下）は地元の皆さんが協力して作製奉納してくださいました。左下の「遊猫水墨画」も「ひな猫」も、どれもこれも愛らしい猫ばかりです。

特集

生きる力

―仏さまに祈り、仏さまと出会う

平成29年度から真言宗智山派では、わたしたちの目標「生きる力―仏さまに祈り、仏さまと出会う」を掲げ、ご本尊さまやご先祖さまに手を合わせ智山勤行式や御詠歌を唱えて祈り、写経、写仏、阿字観などの修行体験から自心に仏さまを感じる信仰生活をすべての方々に推奨して、安らかなる心を皆さまとともに感得することをめざしています。

（写真:上）昭和39年（1964）10月10日の東京オリンピック開会式、（写真:下）昭和39年10月1日の東海道新幹線開業。経済大国への道を歩み始めた日本の高度成長期を象徴する出来事です。そして、この半世紀の間に日本は、バブル経済の崩壊やリーマンショックを経験し、まさに「諸行無常」「栄枯盛衰」の思い通りにはならない世の中をとおりぬけてきました。　写真提供／読売新聞社

「ワン・ツー、ワン・ツー」「ワン・ツー、ワン・ツー」

というフレーズで始まる有名な曲。（ご存知の方も多いと思いますが）今から五十年前、高度経済成長期の只中に流行した『三百六十五歩のマーチ（作詞：星野哲郎、作曲：米山正夫）』です。この曲は私が幼い頃、テレビやラジオからよく流れていました。そして、いつの頃からか私が辛い時、不思議と脳裏によぎる曲となりました。人生いろいろ困難なことがあるかもしれないけれど前を向いて一歩ずつ歩んでゆこう、そう語り掛けてくるこの曲が、辛く苦しい場面に直面した私を元気づけてくれます。

この人生の応援ソングとなっている歌詞には、さまざまな人生訓となる言葉がちりばめられています。中でも最も頷ける言葉は、**「百日百歩、千日千歩、まになる日もならぬ日も」**です。人生一歩ずつ着実に進んでも、思い通りになることもあれば、ならないこともある。まさしくそのとおりではないでしょうか。今までの人生を振り返ると、思い通りになっていないことの方が多いのが現実です。しかし、どのような状況でも〝まず一歩、踏み出してみよう〟というのがこの曲なのです。



このポスターを真言宗智山派の寺院でご覧になりましたか。本宗では、信仰を基にした「生きる力」を感じていただくための活動を展開して約半世紀になります。是非、菩提寺やお仏壇をお参りして、「生きる力」を感じてゆきましょう。

思い通りにならない苦しみ

さて、お釈迦さまの教えには、四つの特徴（四法印）があります（図1）。それは、「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂静」「一切皆苦」の四つです。中でも、あらゆることが苦しみ（思い通りにならない）―「一切皆苦」―ということが、先ほどの曲に合致してきます。そして、思い通りにならないことの具体的な内容が経典に説かれている「四苦八苦」です（図2）。

この四苦八苦をみてみれば、人生は思い通りにならないことばかりだということに気がつきます。

私自身の人生を振り返ってみても、大切な身近な人との別れも経験しましたし、欲しいものを手に取ることもできませんでした。目標をたてたけれど、自分の思い描いていた結

図1

四法印

諸行無常	諸法無我	涅槃寂静	一切皆苦
この世のあらゆるものは移り変わる	あらゆるものは固定的な実体をもたない	煩悩が消えた安らかな境地	あらゆることが苦しみである

苦しみとは

図2

八苦

四苦

1. **生苦**
   生まれる環境や親を選ぶことができない苦しみ
2. **老苦**
   年老いることを避けられない苦しみ
3. **病苦**
   病気になることを避けられない苦しみ
4. **死苦**
   死ぬことを避けられない苦しみ

5. **愛別離苦**
   愛しい者と別れなければならない苦しみ
6. **怨憎会苦**
   憎んでいる者に会わなくてはならない苦しみ
7. **求不得苦**
   求めているものを得ることができない苦しみ
8. **五取蘊苦（五蘊盛苦）**
   煩悩のある身体・心（五蘊）も思い通りにはできない苦しみ

果を得られないこともたくさんありましたし、急な病や思わぬ怪我に苦しんだこともありました。誰もが大なり小なりそのような場面に遭遇し、その時のさまざまな縁を頼りに軌道修正をしながら、一歩ずつ歩んでいるのが人生ではないでしょうか。そして、宗祖弘法大師空海（以下お大師さま）さまもまた、そのような思い通りにならないことを、わたしたちと同じように悩み苦しんだ時もありました。

愛弟子「智泉」の死

お大師さまには、多くのお弟子さんがおりましたが、その中で一番弟子ともいわれる「智泉」（七八九―八二五）という人がおりました。智泉は、お大師さまと同じ讃岐（現在の香川県）の出身で、お大師さまのお姉さまの子ども（甥）といわれ、お大師さまが唐へ渡る前から、お大師さまの許で修行に励んでいました。そして、お大師さまの帰国後に更に教えを学び、ともに密教を弘めるために東奔西走し、いつしか真言宗を託すべき存在となっていたその愛弟子の智泉が、三十七歳で入寂（亡くなる）してしまうのです。お大師さまは、悲しみに打ちひしがれ「ああ哀しいことよ。哀しいことよ。そんなことはしかたないとしても哀しい。ああ悲しいことよ。悲しいことよ。こんなことはどうしようもないと思っても悲しい」と『亡弟子智泉為達嚫文』（『性霊集』巻第八訳 『傍訳弘法大師空海性霊集（中）』著：宮坂宥勝猊下）で表し、お釈迦さまでさえ死を免れることができなかったという真理を理解している我が身でも、智泉の死は、涙を流さずにいられぬほど耐え難いものであることを切々と訴えています。そして『亡弟子智泉為達嚫文』では、悲しみをこらえながら亡き愛弟子の供養のために、生前に教授した真言の教え（仏さまの慈悲を自分の信仰で受け止め、仏さまの心も我の心も衆生の心も平等である大いなるいのちを自覚していくことなど）を智泉に語りかけるように文で表現し、仏の世界へと導かれていくことを願っています。お大師さまでさえ、愛別離苦の理は免れることはできなかったのですが、それでも死別の悲しみや苦しみを、真言の教えの中で生きる自覚とその供養で一つの節目をつけ、愛弟子の死を乗り越え、一歩前に踏み出したのです（弘法大師空海全集第六巻同項　金岡照光訳参照）。

柳に風と「生きる力」
―仏さまに向き合い、前向きに生きる―

時代は下り、江戸時代後期に活躍した仙厓義梵という禅僧がいました。現在でいうところの臨済宗妙心寺派の僧侶で、四十歳以降、福岡博多の聖福寺の住職に任じられ、晩年、

画面の右側には力強い「堪忍」の文字。そして、左下より大きな柳が描かれ、その脇に「気に入らぬ風もあろうに柳哉」という歌。画面上の柳は、左手の方から大風が吹きぬけているのですが、柳は枝をしなやかになびかせそれを受け流しています。　「堪忍柳画賛」写真提供／出光美術館

禅の教えをユーモラスな絵（禅画）で表し、地域の方に仙厓さんと親しまれ活躍しました。その仙厓さんの数ある禅画の中に「堪忍柳画賛」というものがあります。

「長い人生にはさまざまな耐え難いこと、気に入らぬ（風）がおこるけれども、それを現実と受け入れ、しばらくの間耐え抜けば必ず新たな道が開かれる」

そのように解釈できる禅画です。

この禅画をしばらく眺めていたら、真言宗智山派のわたしたちの目標「生きる力―仏さまに祈り、仏さまと出会う」が重なり合ってきました。

柳が強風を受け流すことができるのは何故だろうか。「柳に風」「柳に雪折れなし」の故事にあるが如く、柔らかな枝で受け流しているからだろうか。いや、枝に注目するのではなく、目に見えない部分に注目すべきだ。地中にしっかりした根を張り、その地中の根につながる太い幹があってこそのしなやかな枝。それがなければ強風は受け流せないはず。

思い通りにならない、この移り変わりの激しい世の中を私たちが生きてゆくうえでは、さまざまな逆風に遭遇します。その時、わたしたちが柳のように強風を受け流すには、しっかりした根と幹が必要なのです。そのしっかりした根と幹は、わたしたちが日々、菩提寺やお仏壇のご本尊さまに手を合わせ、お経や真言を唱え、仏さまの心を感じる「仏さまに祈り、仏さまと出会う」という信仰生活で形作る、すなわち信仰の力を身につけてゆくことで育まれます。あくまでも信仰は自力によります。そして信仰の力は目で見ることができませんが、しっかり身につけてゆけば、この移り変わりの激しい無常な世の中で、たとえ逆風と遭遇しても、決してめげずに前を向いて、まず一歩を踏み出して生きてゆけるのではないでしょうか。仏さまの慈悲を自分の信仰で受け止め、仏さま、自分（我）、周りの生きとし生けるもの（衆生）がともに平等である大いなるいのちの世界を感じてゆく。目に見えないけれども、その大いなるいのちの力をしっかり受け止めてゆく。それが「生きる力」です。

仏さまに祈るたびに
仏さまと出会い　仏さまに見守られ
仏さまの生きる力を感じながら生きる
仏さまに祈り、仏さまと出会うために、
からだ（合掌）　手を合わせましょう
ことば（真言）　仏さまのお名前をお唱えしましょう
こころ（三昧）　仏さまの心を感じましょう
を整えましょう

仏さまに祈り、仏さまと出会うなかで、安らかなる心を感じます

真言宗智山派では、わたしたちの目標「生きる力―仏さまに祈り、仏さまと出会う」を掲げて、日々、ご本尊さまを中心とした信仰生活をともに送ることを推奨し、すべての人の安らかなる心を求めてまいります。

まずは、信仰生活の中からその一歩を踏み出してみませんか。

（智山教化センター長　山川弘巳）





画／川上秀行

平成十年十二月十六日第三種郵便物認可「生きる力のエンジン」第九十二号　平成三十年三月一日発行　年四回（六月・九月・十二月・三月の一日）発行　定価一〇〇円（本体九三円）
発行人／芙蓉良英　編集／智山教化センター　発行所／〒605-0951 京都市東山区東大路七条下ル東瓦町九六四　総本山智積院内　真言宗智山派宗務庁

第１回 智積院写真コンテスト作品募集

智積院境内で撮影された
作品を募集します。
みなさまのご応募
おまちしております。







☆応募テーマ　智積院の四季～百花繚乱～
☆撮影、応募期間

春夏期　平成30年3月1日～平成30年8月31日
秋冬期　平成30年9月1日～平成31年2月28日

※詳しくは総本山智積院ホームページ（行事・イベント予定）をご覧ください

総本山智積院HP http://www.chisan.or.jp

京都 総本山智積院

〒605-0951 京都市東山区東大路七条下ル東瓦町964
TEL：075-541-5361　FAX：075-541-5364

写経（しゃきょう）のつどい

毎月21日　13時より
於　金堂
納経料　千円

智積院阿字観（あじかんえ）会

14時より（受付13時より）
於　智積院金堂地下ホール
（参加灯明料五百円・要事前申込）
4月12日（木）
5月12日（土）

宿坊 智積院会館

宿泊料金６、６７０円（朝食・灯明料・税込）
ご予約・お問い合わせ
TEL　075-541-5363
・ＪＲ京都駅よりバス約10分
・京阪電車七条駅より徒歩約10分

※智積院会館新築工事のため、**平成30年12月13日（木）**より宿泊利用並びに館内利用を休止いたします。
※工事中はご不便をおかけいたしますが、あらかじめご了承ください。

東京 総本山智積院別院 真福寺

〒105-0002　東京都港区愛宕1-3-8
TEL：03-3431-1081　FAX：03-3431-0203

愛宕薬師（あたごやくし）ご縁日（毎月８日）

※８日が土日祝の際は第一金曜日
・大護摩供法要　12時より
・写経会（納経料千円）14時より
※初めて写経に参加される方は13時30分までに受付にお越しください
3月8日（木）
4月6日（金）
5月8日（火）

やすらぎ寄席

毎月第３木曜日　18時30分より
・恒例 抽選会開催
於　本堂（木戸銭千五百円）
3月15日　三遊亭
4月19日　談志一門会
5月17日　三遊亭

真福寺阿字観（あじかんえ）会

昼の部15時・夜の部19時より
無料・要事前申込
3月27日（火）　4月24日（火）
5月22日（火）

愛宕薬師フォーラム（無料）

2月19日（月）14時より
「幸せなまちづくりとは」
コミュニティデザイナー／山崎亮（やまざきりょう）先生

Facebookページを開設しました　智積院　検索